愛知学泉大学家政学部　令和７（2025）年度ティーチングポートフォリオ　2026 年 3 月 20 日作成

学科　こどもの生活学科	氏名　　伊藤　久美子

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa 型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ　ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ　管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ　こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。

1　教育の責任

私は、「幼稚園教諭免許状」「保育士資格」に関わる教育福祉系の科目と実習関連の科目を担当している。幼稚園教諭として幼児教育の現場で子どもと関わった経験を生かし、保育の素晴らしさや楽しさはもちろんのこと、子どもを優しく受け止める愛情やゆとりを持った心、子どもと共に遊びを楽しむことができる明るい心、保護者の気持ちを理解して支援する力など、保育現場で必要とされる保育者を育てることに努めている。保育という尊い営みに携わる教員・保育士として、学生一人ひとりが子どものかけがえのない存在を理解し、その権利を尊重できる保育者となるよう導くことに深い責任を感じている。

科目名	学科	開講期	受　講	備考
こどもと環境	こどもの生活	３年前期	４５	専門科目
保育内容（表現 A）	こどもの生活	２年前期	３６	専門科目
保育実践演習	こどもの生活	４年前期	３６	専門科目　オムニバス
保育実習指導Ⅰ	こどもの生活	２年後期	３２	専門科目
保育実習指導Ⅱ	こどもの生活	３年後期	４３	専門科目
保育者論	こどもの生活	１年後期	３７	専門科目
保育内容（環境）	こどもの生活	２年後期	３７	専門科目
教職保育特論３	こどもの生活	３年前期	７	専門科目　オムニバス
保育実習Ⅰ	こどもの生活	２年後期	３０	専門科目
保育実習Ⅱ	こどもの生活	３年後期	４２	専門科目
他５科目	こどもの生活			

2　教育の理念と目的

保育者にも個性があり、子どもと同じように学生にも得意不得意の個性があって当然である。しかし、学生によっては、向上心や社会の要求に応える態度を備えていても、その魅力を十分に発揮できない学生がいる。社会が求める能力と学生自身が持つ魅力や能力が相応するような教育を行うには、自分の長所を自分で認めることができるように学生の魅力を具体的に言葉にして伝えることだと考える。逆に、短所となる部分は丁寧に伝え、改善策を自ら熟考して向上できるよう事例を挙げながらアドバイスすることを心がけている。教育の根幹として「自分が大切にされた」という経験こそが「人を大切にする心」を育むという信念を持ち、学生一人ひとりの個性を認め自己肯定感を高める支援を徹底するとともに、自信を持って自分の考えを表現したり、何かに挑戦したりして、多様な子どもの姿を想像しながら保育を思案できる力を身につけてほしいと考えている。自身の研究では、「子どもの視点の可視化」や「対話のツールとしてのサンドアートの取り組み」を授業に取り入れることで、学生が単なる知識の習得に留まらず、主観的・身体的に子どもの内面を理解し、将来の保育現場において子どもや保護者と共に感性を育み合えるような、豊かな人間性と倫理性、そして深い洞察力を備えた専門職を育成することを目的としている。

3　教育方法
保育内容に関する科目（保育内容「環境」、保育内容「表現 A」、こどもと環境）は、アクティブラーニングを取り入れた能動的な学びができる環境を整え、理論と実践が結びつくように構成している。保育内容「表現 A」は、様々な表現活動を体験して総合的な保育の表現を理解するため、コミュニケーションを重視したグループ活動を通して、自分の意見や考えをメンバーに伝える表現を体現できるよう工夫している。また、保育内容「環境」、こどもと環境の授業では、エプロンシアターや手作りおもちゃなどの作成を通して、より実践的な保育技術を習得できるようにしている。実習関連の科目においては、理論と実践をバランスよく組み込み、保育者の役割をイメージしながら子どもとの関わり方や保育の実技力の向上を目指し、成長できた点と今後の課題を明確にして、次の実習に活かすことができるように省察する。（添付資料１）
4　授業改善の活動
授業改善のため、学生からの授業評価アンケートを真摯に分析しながら、次期授業での具体的な改善策を実行している。例えば保育内容「表現 A」において学生から寄せられた「サンドアートの演習時間をより多く確保したい」という要望に対して、講義部分の凝縮や事前学習の導入による時間配分の最適化を図るなど即座に改善を実行した。さらに、保育実習指導Ⅰ・保育実習指導Ⅱの実習に関連する科目においては、学生が抱く実習への不安を解消しながら、保育現場の最新課題をフィードバックした指導案作成の指導の強化を図った。また、実技発表や模擬授業のための作業時間を設けることで、学生が十分に自らの力を発揮できる授業体制の構築に努めている。
5　学生の授業評価
学生の評価は、シラバスに記載している通り、学期末試験と平常評価（レポート、小テスト、成果発表※プレゼンテーション・作品制作、学修態度※主体性、実行力、課題発見力など社会人基礎力を含む）を組み合わせて行っている。 2025 年度（令和 7 年度）前期の授業評価アンケートにおいては、担当した全 3 科目で高い満足度を獲得しており、特に「保育内容（表現 A）」では満足度 4.59、約 9 割の肯定的評価を得たほか、自由記述欄でも「サンドアートが楽しい」「もっと先生の授業を受けたい」といった実践的な内容に学生の関心が寄せられている。多くの科目で「教員の授業時間分の学修内容実施、明確で理解しやすい説明、質問や相談への配慮、シラバスとの一致、成績評価基準の明確さ」に対して高い評価を得ている。これらの結果は、学生が授業内容を理解しやすく、安心して学べる環境が提供できていることが客観的な数値として実証されている。（添付資料２）
6　学生の学修成果
授業では、具体例の提示、実践的な活動の導入、課題提示の工夫、丁寧な個別指導などを通して、学生の知識や理解が深まるように工夫し、保育の実践力の向上と主体的な学びによって学修成果の向上を目指している。特に、保育教材の作成において、指導案立案による保育現場での活用方法を思索することで、実習に向けた事前準備ができ、実習に臨む意欲を引き出すことができる。模擬授業など保育教材を使った発表の経験によって、実習を通して学びがどのように保育士としての専門性に繋がるのかを具体的に示すことで、学生の学びの深化とモチベーション向上を目指したい。また、写真撮影活動を通じた環境理解の変容調査では、学生が大人視点では見落としがちな微細な危険箇所や豊かな遊びの素材を子どもの目線で再発見する力を身につけていることが証明されたほか、サンドアート等のグループ表現活動を通じて、学生同士が対話を重ねてストーリーを構築し作品を完成させる過程で、保育者に不可欠なコミュニケーション能力や共感的な態度の深化という顕著な成果が見られた。
7　授業科目に関連した教材開発
保育者の資質能力として不可欠なコミュニケーション能力や表現力を向上させることを目指して、「サンドアートシアター」を取り入れた授業を実践している。学生の感性を育み、子ども理解を深めるための教材として開発し、保育内容（表現 A）の授業に取り入れている。また、保育教材作成において学生がイメージしやすいよう、多数の見本を作成し、学生が実物に触れることで具体的な教材の構成や工夫を視覚的に理解することができる。様々な教材を比較してみることは、子どもの発達段階や興味に応じた適切な教材を選ぶ力を身につけることができると考えている。その他、現代の保育環境に最適化した「実習のてびき」を改訂し、保育実習指導Ⅰ・保育実習指導Ⅱの授業において学生の実習事前学習に活用した。
8　指導力向上のための取り組み

授業評価アンケートの結果を詳細に分析し、リフレクションペーパーを作成して授業改善に積極的に活用している。教育の質を向上させるため、2025 年 8 月の全国保育士養成セミナーでの「サンドアートシアターの取り組み」についての話題提供や、2026 年 2 月の全国保育士養成教育学会（第 10 回大会）における「写真撮影活動による環境理解の変容」のポスター発表など、自身の研究成果を積極的に学会などで発表している。また、愛知県の認可外保育士や初任保育士を対象とした現任研修の講師を定期的に務めることで、保育現場の最前線にある課題を常に自身の授業や実習指導に還流させ、理論と実践を架橋する指導力の研鑽に励んでいる。自身の研究では、幼稚園を研究フィールドとし、子どもたちの遊びの環境や保育者の子ども理解について調査し、保育者の指導力や幼児教育の質の向上に寄与するための方法を検討している。研究会では、他大学の教員及び保育現場の保育者たちと共に、保育者を目指す学生の効果的な保育実習指導の在り方について研究している。これらの教育・研究活動で得た知識を学生指導に活かしていきたい。

9　今後の目標

私の今後の目標は、学生が主体的に学びに向かうことができる授業環境をさらに展開させていくことである。保育現場の具体的な事例を積極的に取り入れ、理論と実践を結びつける授業展開を強化するため、指導案立案や保育教材の作成を通して学生の保育実践力を鍛えたいと考える。学生が自己肯定感をもって何事にもポジティブに取り組めるよう、より一層学生一人一人と丁寧に向き合い、適切なアドバイスや指導をしたい。そのためには、授業アンケートの結果を真摯に受け止め、日々授業改善を行っていきたいと思う。短期的目標としては、2025 年度に導入した写真撮影活動による「子どもの視点の可視化」を軸とした授業設計をさらに洗練させ、学生が自己の保育観をより深く省察できる教育プログラムを確立することを目指す。長期的には、サンドアートや写真、表現遊びといった感性教育を通じて、子ども・保護者・保育者が三者で育ち合える豊かな保育実践の場を創造できる人材を育成し続け、急速に変化する社会において保育の質の向上と、子どもたちの健やかな成長を支える保育士養成教育の発展に永続的に寄与することを展望している。保育者不足が叫ばれる昨今ではあるが、保育の仕事の魅力ややりがいを伝え、愛情をもって子どもたちに接することができる保育者を育成したい。

10　添付資料

添付資料（1）シラバス
添付資料（2）授業アンケート